

アイガットは野鳥だ!

2026. 5.28 | 木 |

9.27 | 日 |

憧れたり、信仰したり。はたまた愛でたり、食べてしまったり。

古くから、私たちにとって身近な小さな命である「鳥」。

天空を優美に舞う姿から「神の使い」と崇め、その囀りに人生の悲喜交々を重ねて表現するなど、美しい日本の文化を育んできました。多様な芸術と娯楽が華ひらいた江戸時代、鳥はブームを巻き起こします。將軍から庶民まで鳥料理に舌鼓を打ったほか、海外から持ち込まれた珍しい鳥に驚嘆し、鳥を飼育して鳴き声の美しさを競い合いました。

本展では鵜飼や鷹狩など鳥と生きる暮らし、お洒落心をくすぐる鳥文様、魅惑的な羽色に由来する色、鳥の瞳だからこそ見える景色など、日本文化を縦横無尽に天翔ける野鳥の軌跡を広重の作品とともに辿ります。

鶯鷺夫婦に千鳥足、雀の涙に鶴のひと声。

雁首揃えて、頂山の鶯鳥。どうぞ皆さま呼子鳥!

はみきゅん♡



キュンなポイント HIGHLIGHTS

日本文化と鳥の
トリセツ!

食べたり、愛でたり、マネしたり。
狩猟や文学、デザインに至るまで、
日本文化と鳥の素敵な関係を
ざっくりトリまとめてお届けします。

色も姿もお洒落番鳥

鳥は、立ち姿も飛び姿も、そして色
だってお洒落番長! 江戸っ子を虜に
した鳥にちなむ色やデザインが目白
押しです。

それ、鳥な地名カモ

近くに鳥にちなむ地名はありませんか?
信仰や伝説、歴史など面白エピソードを
浮世絵から紹介。いざ、時空を超えた
バード・ウォッチングへ!

水辺に里に

1
鳥の住処

四季折々の自然と豊かな水源に恵まれた日本は、野鳥の宝庫。海、山、川辺、そして人里などで、実に多くの野鳥に出会えます。目を凝らし、耳を澄ませば、季節の風の薫りとともに鳥たちの気配が感じられるはず。鳥は、今も昔も身近で小さな友達。それゆえに、飛び去る姿に「雀のお宿」はどこにある? 「鳥の寝床は山の古巣」、なんて親しみを込めたフレーズが生まれたのかもしれない。

君なつかしと都鳥幾代かここに隅田川 一長唄『都鳥』

古来、「都鳥」は隅田川の縁の鳥として文学や絵画に登場する。『伊勢物語』の主人公・在原業平が、隅田川の都鳥を見て、京の女を想い和歌を詠んだことはよく知られる。「都鳥」はカモメ科の「ゆりかもめ」で、主に冬鳥として河や海岸などの水辺に飛来する。《芝うらの風景》は、江戸湊に面した芝浦の風景を描く。右手にはかつて將軍家の鷹狩の場や別邸にもなった「浜御殿」、左手には座礁しないよう船に航路を知らせる目印「漂標」が見える。その近くを、群れをなして飛ぶ都鳥がなんとも愛らしい。《墨田河橋場の渡かわら竈》は、浅草の北東にある今戸(東京都台東区)の景色を描く。土人形や瓦で有名な「今戸焼」が作られ、窯から煙が立ち昇る。隅田川では都鳥が羽を休め、橋場の渡しを行き来する舟がゆったりとした刻の流れを感じさせる。



名所江戸百景 芝うらの風景



名所江戸百景
墨田河橋場の渡かわら竈



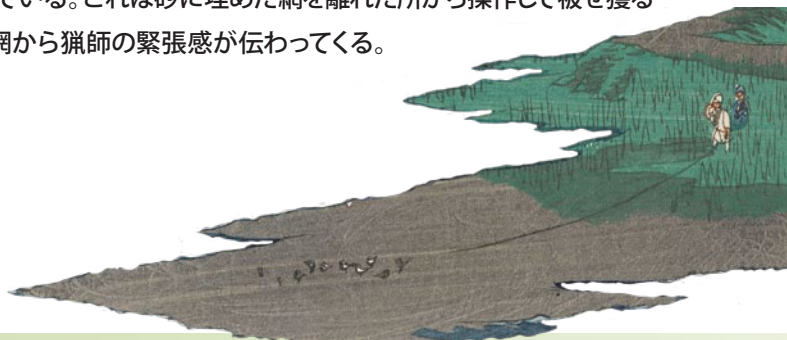
捕まえて！食べさせて♡

鳥と生きる

鳥は賢く、そして美味しい。群れで行動する鳥は協調性が高く、人に懐く種類も少なくありません。
 鵜匠や鷹匠は、権力者の庇護の下、飼いならした鳥たちと共に漁や狩りを行いました。その一方、個体が多く
 身近な食材であるのも事実。鳥食文化が発展した江戸時代、鶏卵をはじめ、鴨、雉子、雲雀、鶉などは貴重な
 たんぱく源として珍重されました。
 連綿と続く鳥との特別な関係は、まさに「NO BIRD, NO LIFE」ですね。

千鳥こいこい、さあ獲るぞ！

堀江村・猫実村(千葉県浦安市)は、広い遠浅の干潟があり、豊かな魚介類に恵まれた土地であつた。そのため、貝などを食べに多くの渡り鳥が飛来した。
 本図は、境川を挟み左側(南岸沿い)に堀江村、右側(北岸沿い)に猫実村を描き、富士を望む。手前の砂州には千鳥が集まり、2人の猟師がそれを無双網で捕まえようとしている。これは砂に埋めた網を離れた所から操作して被せ獲る
 獵法で、伸びる網から猟師の緊張感が伝わってくる。



名所江戸百景 堀江ねこざね



季節を告げ、想いを届ける

詩歌な歌声

鳥のひと声に四季の巡りを知り、心に打ち寄せる様々な想い。古来、日本では鳥の鳴き声に自らの心情を重ね、和歌や俳句などに詠んできました。鶯の初音に胸躍り、時鳥の一声を待ち
 焦がれ、雁が音に人生の悲哀を覚えたのです。
 また、「法華経」「てっぺんかけたか」「仏法僧」など、鳥の囀りを人の言葉に置き換えた
 「聞きなし」も、鳥への愛着やクスッと笑えるものばかり。
 鳥よ、遠く離れたあの人へこの想いを届けておくれ！

鶯の初音を想う 春うらら

「初音の馬場」(東京都中央区)は徳川家康が関ヶ原出陣に際して馬揃えを行った所で、近くに初音稲荷(現・初音森神社)があったことが呼称の由来という。
 この辺りはかつて鶯が多く棲む森があり、その囀りが響くことから「初音の里」と呼ばれていたという。
 本図は初音の馬場の春の景色を描く。火の見櫓を背景に、干されたたんもの反物が風に揺らめく。近くの紺屋町で染められたものだろう。
 柳の柔らかな新芽に春が感じられ、姿こそないが鶯の囀りが聴こえてくるようだ。



名所江戸百景
馬喰町初音の馬場





伝説とともに

鳥な地名

鳥にちなむ名を持つ川や土地が、身近にありますか？地名は、その土地の歴史や地形の特徴が詰まった宝箱。気になる地名を調べてみると、興味深いエピソードや伝説に辿り着くことがよくあります。

日本武尊の「白鳥伝説」や将軍の「鷹狩」にちなむ場所、鳥に似た地形、「水流」を同じ音の「鶴」に置き換えたなど、日本各地に由来が伝わっています。

調べ始めると、あまりの面白さに時間を忘れてしまう鴨。

はくちょう

やまとたけるのみこと

白鳥となり飛び立った、日本武尊の物語

庄野宿(三重県鈴鹿市)は農村地帯の小さな宿場。日本武尊の形見である笠と杖を祀る御笠殿社(現・加佐渡神社)と、その北西に尊の陵墓と伝わる「白鳥塚」があることで知られていた。なお、現在は能褒野王塚古墳(三重県亀山市)が尊の陵墓と治定されている。

本図は田園が広がる街道で休む人足たちを描く。右手奥に白鳥塚が見える。荷物には飾りがあり、祝い事の荷なのであろう。飾りの傘や手に持つ息杖に、伝説の地であることを匂わせているのかもしれない。



縦絵東海道
五十三次名所図会 四十六
庄野 白鳥塚古跡



鳥みたい

鳥になりたし

ふわふわな羽毛、愛らしい仕草、リズムカルな足取りや優雅な流線形の姿など、鳥には魅力がたくさん。これらの特徴は、身近な物や言葉にも用いられました。花瓶や酒器の「鶴首」は鶴の気品漂う長い首、煙管の先端部「雁首」は長くうねる雁の首に擬えた呼び名です。

また、鳥にちなむ慣用句も豊富。鴛鴦夫婦、鳥の行水、千鳥足、鶴呑み…、あなたはいくつ思い出せますか？



つるくびとつくり

びしゅ

鶴首徳利の美酒を、首長くして待ちわびる

戸塚(神奈川県横浜)は江戸から10里18町(約41km)。宿場の東は権太坂、西側には大坂という急勾配が続き、旅人にとって難所であった。

江戸を早朝に出発した旅人は、戸塚で最初の夜を迎える事が多かった。

本図は風景を広重、手前の人物を三代豊国が描く。蠟燭を灯した

室内では、夜宴の真最中。片肌脱いだ男性が、運ばれた食事に

待ちかねたように手を伸ばす。鶴の首に似た優美な形の

「鶴首徳利」には、酒がたっぷり入っているのだろう。



雙筆五十三次
戸塚





幸せをトリ込む！

羽音文様
ハッピー
デザイン

平和、自由、カワイイ、神聖…。鳥が持つイメージのなんと多いこと！

鳳凰は極楽、雀は豊作や繁栄、鶴は長寿、鴛鴦と云えば夫婦円満など、いずれも馴染み深いものばかり。とりわけ日本では、古くから「花喰鳥」や「波千鳥」など、鳥の佇まいに人生の希望や願いを託した「吉祥文様」が親しまれてきました。慶びの鳥文様で福をトリ込み、ハッピーライフを！



ちどり ちど もくひょうたつ せい きっしょうもん 千鳥は「千取り」！目標達成の吉祥文

大磯宿(神奈川県中郡)には、仇討ちで知られる『曾我物語』の兄・十郎祐成と恋人・虎御前の伝説が多く伝わる。また宿の西端には、平安歌人・西行の和「心なき身にもあはれはしられけり 鴨立つ沢の秋の夕暮」にちなんで結ばれた「鴨立庵」があった。

本図は風景を広重、手前の人物を三代豊国が描く。虎御前が櫛を懷紙で拭いて十郎との別れを惜しむ、「髪梳き」の場面。十郎は群千鳥、弟の五郎は蝶文様が定番で、本図の十郎の直垂にも群千鳥が見える。

雙筆五十三次
大磯 鴨立沢西行庵



羽ばたきの彩

色鳥々
いろトリどり

彩り豊かな羽は、小さな宝石。光の加減で色合いが微妙に変わるさまは、まるで魔法のようです。実は私たち人間よりも、鳥は多くの色を感知できるとか。羽の色で仲間を見分けるほか、姿の美しさが「モテ度」にも関わるといふから驚きです。色彩文化が洗練された江戸時代、鶯色や雀色、鶯色に朱鷺色など、鳥にちなむ色が流行しました。美しき羽衣への憧れから生まれた、色トリどりの世界をお楽しみください。

夏の夕べに開く、朱鷺色の合歓の花！

鐘ヶ淵(東京都墨田区)は隅田川と綾瀬川の合流点で、将軍が鷹狩を行ったほか、合歓木や虫聴の名所としても知られていた。夏、夕方になると傘状に薄紅の花を咲かせる合歓は、その美しさが和歌や俳句にも詠まれてきた。

本図は、合歓の花影から見る綾瀬川の穏やかな夕暮れ時を描く。筏を操る男性の視線の先を、一羽の鷺が飛んでゆく。夏の夕陽を受けて薄紅色にやさしく揺れる合歓の花が、まるで飛び立つ朱鷺の羽のように美しい。

名所江戸百景
綾瀬川鐘か淵





鳥が見る絶景 “鳥瞰図”

あま
か
天翔ける瞳
ひとみ

あの鳥のように。もっともっと、高く。空を舞う鳥には世界がどんな風に見えているのか、想像するだけでワクワク、ドキドキ。人は鳥への憧れを詩歌に詠み、歌い、踊り、また絵にも描いてきました。上空から見下ろす鳥の視点で捉えた「鳥瞰図」は、まさに絶景の体感スクリーン！視点を変えると新たな発見があるとは、よく言ったもの。さあ、開放感を求めて、見たことのない広い世界へ！



名所江戸百景
深川三十三間堂

上空から覗く、長い長い120mの観音堂！

富岡八幡宮の東側には、かつて三十三間堂が建っていた。京都の蓮華王院の本堂（三十三間堂）を模して建てられ、京都と同様に弓術稽古のために遠くの的を射抜く「通し矢」が本堂西側の軒下で行われていた。

本図は、深川の三十三間堂を空から見下ろす鳥瞰の視点で描く。小さく描かれた武士や子どもも、放たれた矢に感嘆の声をあげているようだ。観音堂が画面に収まらないほど長く強調され、朱色がその存在感を一層引き立てている。

次回予告
通りゃんせ、渡りゃんせ

ようこそ、異世界へ！

2026. 10.1 | 木 |

▶ 2027. 1.31 | 日 |

不思議なことが、起きる場所。魔性や神霊、死者など「この世のもの」ではない存在や、見たことのないような「別世界」は、さまざまな「境界」を越えた時に登場とか。人生においても日常から一歩踏み出すことで、新たな世界が開けたり奇跡的な出会いが起きるもの。人や物の移動が活発になった江戸時代、人々は越えたり渡ったりの旅を通して様々な未知との遭遇を時に恐れ、時に楽しみました。

本展では、二つの世界を架け渡す「橋」、山と里あるいは天界と下界を結ぶ「坂」、現世と神域を繋ぐ「鳥居」、日常から非日常へと誘う「旅路」など、異世界と私たちを結ぶちょっぴり怖くて不思議な「境」の魅力を広重の作品から読み解きます。

あの橋を越えたら。あの坂の先には――。

彼方と此方を繋ぐ間は、人生に変革をもたらす道標。

往きつ戻りつ怖いながらも、通りゃんせ、渡りゃんせ。

何が見えるか 行っただけのお楽しみ



名所江戸百景 《八つ見のはし》

貨幣・浮世絵ミュージアム
MONEY & UKIYO-E MUSEUM



公式ホームページ

052-300-8686 担当：鏡味・那須

ご案内

- 開館時間 | 9:00～16:00 (入館は15:30まで)
- 休館日 | 祝日(7/20、8/11、9/21・23)
- 入館料 | 無料 (団体見学の方は事前にご連絡ください)

〒460-8660 名古屋市中区錦3-21-24 三菱UFJ銀行名古屋ビル1階

052-300-8686 <https://www.bk.muf.jp>

■ 駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

■ 催しの中止・延期・変更の可能性があります。

「Instagram (インスタグラム)」はMeta Platforms, Inc.の登録商標です。



Instagram



雀
すずめ

雀踊



雀目まで踊り忘れぬ

葛飾北斎「伝神楽手北斎漫画 三編」部分
メトロポリタン美術館蔵

編笠を被り、雀の模様の着物を尻端折りした奴姿で、飛び跳ねる雀の動きを三味線と唄に合わせて真似た踊り。豊年を願う祭礼の練物として始まり、江戸歌舞伎の行事「曾我祭」では、舞台の最後に役者が総出で踊る「大踊」として欠かせなかった。

中村芝雀



三代切川豊国《古今俳優伝略大全 中村芝雀》部分
文久3年(1863) ★

江戸時代後期の歌舞伎役者。

江戸時代の

鳥な文化



優雅だったり、可愛かったり様々な魅力を持つ鳥の姿は、生活道具から娯楽に至るまで生活の中に取り入れられました。舞踊や髪型など、鳥の特徴に由来する文化を紹介します。

ふくら雀



鬘の形が羽をのぼした雀の形に似た髪型。

雀



式亭三馬著、勝川勝英・歌川国国画《遊覧圖》(巻八巻)部分
享和3年(1803) ★

元禄時代(1688〜1704)、京坂地方の芸妓が結った髪型。鬘の上に渡した毛先を鬘尻より後ろへ出す。

鷗髷

カモメの尾みたいなヘアスタイルよ

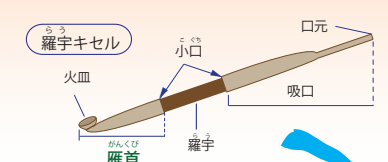


西川祐局「絵本常盤草」部分 享保16年(1731)
メトロポリタン美術館蔵

鷗髷(なほ)は日本髪の後頭部分。上方では「つ」と呼ぶを鷗の尾のように後ろへ長く突き出した髪型。江戸時代中頃、若衆や娘の間で流行。

雁

煙管の頭部で煙草を詰める火皿のついた部分。長くうねった雁の首に似ていることに由来。



雁首

鶴



鶴の首のように細長い口を持つ徳利や花瓶。

鶴首

鷺

鷺娘



白鳥年「鷺娘十七歳」部分
昭和10年(1935) ★

歌舞伎舞踊。長唄。五変化所作事。《柳難諸鳥囀》の一曲。白無垢の娘姿で現れた白鷺が、恋に悩む様子を踊る。

鳶

鳶の者



建築現場に従事する職人。鳶口(鳶の嘴に似た鉄製の鉤が付いた道具)を持つことに由来する。町火消しも兼ね、ヒーローとして女性たちを魅了した。

〇〇雀

雀が鳴くようにおしゃべりな人。またある場所に良く出入りして、その事情に詳しい人のこと。江戸雀や京雀、楽屋雀などという。

雀焼

背開きにした鮎を串に刺して照り焼きにしたもの。「ふくら雀」に形が似ていることに由来する。

雀売 / 鳥売



東洲斎写楽《三代目市川八百蔵の雀売り 文次安方》部分
寛政6年(1794) シカゴ美術館蔵

旧暦8月15日に行われた放生会で放つための鳥を売る物売り。鳥は雀に限られていたという。

吉原雀



喜多川歌麿《当世踊子揃 吉原雀》 寛政5年(1793)
出典: Colbase(https://colbase.nich.go.jp/)

明和5年(1768)初演の歌舞伎舞踊。男女2人の鳥売りが、放生会(生き物を放ち殺生を戒める法会)の由来や遊里の風俗を描写して踊る。吉原の冷やかしの客の俗称でもある。

落雁

米、豆、麦などの粉に砂糖類を加えて練り、型に入れて乾燥させた干菓子。由来は中国の菓子「軟落甘」や、表面に黒胡麻が散らされた様子を雁が列をなして降りていく「落雁」になぞらえたなど、諸説ある。



落雁 協力：大黒本店 全品市中央区

鶯餅

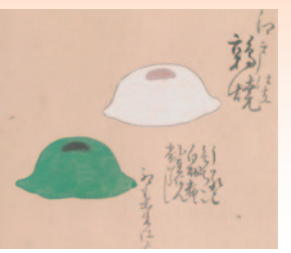
青きな粉をまぶして鶯に色と形を似せた餅菓子。桜餅とともに、春の菓子として庶民に愛された。



《蒸し菓子集》「鶯餅」部分 ★

鶉焼

丸く膨らんだ卵型で、まだらの焦げ目があり、鶉に似た餅菓子。



《御菓子集》「鶉焼」部分 ★

雁が音

江戸時代から飲まれるお茶の一種(荳茶)。煎茶の銘。由来ははつきりしないが、雁は海を渡る際に枝を啜えて飛び、海に浮かべて休むという逸話があり、その枝の形に似るためという説がある。



がんもどき

漬した豆腐に野菜などを加え、丸めて油で揚げた加工品。もとは菰莢を使った精進料理で、雁の肉の味に似ていることが由来の一つという。関西では「飛竜頭」と呼び、南蛮渡来の菓子が由来とされる。



★: 国会国会図書館蔵

江戸時代 味な鳥

鳥をめぐる

色と文様

鳥に由来する色名が増えたのは、町人文化が花開いた江戸時代。「奢侈禁止令」の下、庶民が着用できる茶や鼠色などは、特に多くのバリエーションが生まれて大流行した。

魅力的な羽衣の色彩は、古くから日本人の美意識を彩ってきました。贅沢を禁じた「奢侈禁止令」によって茶色と鼠色が流行色だった江戸時代、鳥に由来する数多くの色名が誕生しました。また、姿や習性からイメージする勇猛さや神聖性が家紋になったほか、人生の様々な希望や願いを託した「吉祥文様」として親しまれてきました。

色
イシドリ

ニワトリ
卵(玉子)色 鳥の子色

鶏の卵の殻のような
淡い黄色。

鶏の卵の黄身の色。
卵を庶民もたべられる
様になった江戸時代
前期からの色名。

鴨の羽色

雀色 / 雀色時

鳥の濡羽色 / 濡鳥

鳥
アン

松喰鶴

折鶴

丸鶴

向鶴菱

向かい合う鶴を菱形に
図案化した文様。

翼を広げた鶴を円形に
図案化した文様。

折鶴を図案化した文様。

大陸から伝わった
花喰鳥のデザインを、
松と鶴の組み合わせに
和様化した文様。

飛ぶ姿が美しく身近な命である鳥は、
古くから文様として好まれてきた。
浜や波と組み合わせたり、家紋や歌舞伎役者の
定紋に使われたりと、
広く愛されてきた。

水に濡れた鳥の羽の
ように、しっとり
艶のある黒色。

雀の羽のような茶色。
夕暮れ時を表す言葉と
しても用いる。
江戸時代からの色名。

雄の鴨の首や羽のような
濃い青緑。
万葉集に詠まれる色名。

トキ
鵠唐茶 朱鷺(鵠)色

ヒワ
鵲茶 鵲色

ウグイス
鶯茶 鶯色

タカ
鷹羽

タカ
鷹羽

朱鷺の風切羽(飛ぶために
重要な翼の主要部)の色。
薄紅に近い。江戸時代
からの色名。

明るい茶色。
江戸時代からの色名。

鵲の羽のような
黄緑色。

茶色がかった鵲色。
江戸時代中期に流行。

鶯の背のような、
やや濃いめの黄緑。
江戸時代からの色名。

鶯色より茶色がかった
黄緑色。江戸時代に
流行し、特に女性に
好まれた。

鷹の羽をかたどった紋。図の
「丸に違い鷹羽」のほか、「並び
鷹羽」、「井上鷹羽」などがある。

鷹の羽をかたどった紋。図の
「丸に違い鷹羽」のほか、「並び
鷹羽」、「井上鷹羽」などがある。

ハト
山鳩色 鳩羽色 / 鳩羽鼠

トビ
紺鳶 黒鳶 紫鳶 鳶色

チドリ
光琳千鳥 群千鳥

カリ
雁行 結び雁金 雁金

鳩の羽のような、わずかに
青みのある灰紫。江戸時代
後期に流行した鼠色の一種。

深く淡い黄緑。
「平家物語」で壇ノ浦に
入水した安徳天皇の御衣は
山鳩色。

鳶の羽のような茶褐色。
江戸時代中期頃に流行。

蘇芳を主染料に染めた
淡い紫色。

鳶色をさらに暗くした
黒みのある茶褐色。

淡い青紫色。

雁を二羽を結んだ
ように交差させた
形の紋。

雁を二羽を結んだ
ように交差させた
形の紋。

雁を二羽を結んだ
ように交差させた
形の紋。

雁を二羽を結んだ
ように交差させた
形の紋。

尾形光琳ら「琳派」の
画風を真似て、
装飾美を生かした
波千鳥の文様。
江戸中期に流行。

たくさん千鳥が
飛び交う様子を
意匠化した文様。

たくさん千鳥が
飛び交う様子を
意匠化した文様。

※色票は、内田由記著『定本 和の色辞典』を参考に制作した。

信仰

福をワシづかみ〜

おとりじん じゃ とり 鷺神社の酉の市



歌川広重・三代歌川国貞『江戸自慢三十六興 酉の丁銘物くまで』
文久4 / 元治元年 (1864) ★

鷺神社(東京都台東区は、天之日鷺命、やまとけのあそと まつ) 日本武尊を祀る。十一月の酉の日に日本武尊が戦勝のお札参りをした伝説から例祭「酉の市」が江戸時代に始まった。
福や富を鷺掴みにするという縁起物の熊手が売られ、商売繁盛と開運を祈る人が絶えなかった。

鳥の信仰と飼育

古来、鳥は神の使いとして崇められ、信仰されてきました。美しい姿や声は愛でる対象ともなり、大名や武士ら上流階級の間で飼育が始まります。江戸時代中頃には庶民にも飼育ブームが広がり、多くの飼育書も出版されました。

導きの神「八咫鳥」

神武天皇が東征の時、熊野から大和にぬける山中の道案内として、天照大神が遣わせた鳥。三本足の鳥の姿で、導きの神として信仰されたきた。

日本神話と鶏

天照大神が天の岩屋戸に籠り、世界が闇に包まれた時、天鈿女が舞い、八百万の神々が「常世長鳴鳥(鶏)」を鳴かせて天照大神を呼び戻したという。鶏は太陽の出現を促す霊鳥として、神社で大切にされている。

境内に鶏がいる神社は けっこうあるね！ コケッコー



石上神宮(奈良県天理市)の鶏

鳥居



御神域との境に建てられた「鳥居」は、一説には神に供える「鳥(鶏)の止まり木」が起源という。

はち まん ぐう 八幡宮と鳩

「ハ」の字が向かい合う鳩になっているよ！



南無八幡大菩薩！ハトは戦勝のシンボルなのだ！



歌川広重『江戸名所 湯川八幡境内』 天保10・13年(1839-42)頃 シカゴ美術館蔵



手向山八幡宮(奈良県)の石灯籠

飼育

とり や 鳥屋

飼育するための様々な鳥を売る店。鶯や鶉に鳴声を教えることもあったという。



時絵師源三郎『人倫訓蒙図説』7巻(4) 部分 元禄3年(1690) ★

かちょう ぢや や 花鳥茶屋

寛政(1789-1801)から文化(1804-1818)期頃、孔雀や鸚鵡などの珍しい鳥をみせる茶屋が江戸や大坂に登場した。

鳥力フは、浅草や両国にあつたのよ

歌川国貞『花鳥茶屋』部分18世紀



ColBase (https://colbase.nich.go.jp)

マニア きょく てい ば きん 鳥狂いの曲亭馬琴

『南総里見八犬伝』で知られる戯作者・曲亭馬琴(1767-1848)は愛鳥家で、カナリアや文鳥など百羽近くの鳥を飼育した。馬琴の鳥好きを聞きつけた鳥屋が頻繁に出入りしたと伝記『吾仏乃記』にある。また、『禽鏡』という鳥類図譜も手掛けた。



曲亭馬琴作・歌川国貞絵『南総里見八犬伝』第九巻第三十三下 部分 文化11~天保13年(1814-1816) ★

とりあわせ こ とりあわせ 鳥合／小鳥合

江戸時代、飼育した鶯や鶉を持ち寄り、鳴声や体形の優劣を競う「鳥合」が流行した。鶉は雄の鳴声が好まれ、巾着に入れて腰から提げて育てることもあった。

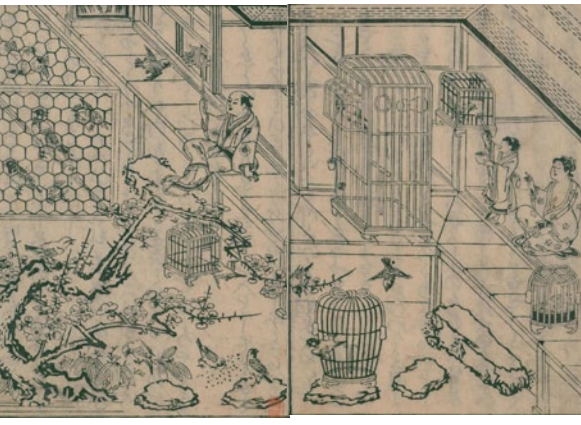
かわいいうちの子をみて！



喜多川歌麿『風流小鳥合 鶯』 宝暦4年~文化3年(1754-1800)頃 メトロポリタン美術館蔵

よぶ こどり 喚子鳥

貴族や大名らが中心だった鳥の飼育は、江戸時代中期に庶民にも広がった。鶯や鶉などが人気で、『百千鳥』『飼籠鳥』など鳥の飼育書も数多く出版された。



蘇生堂主人著『喚子鳥』 二巻 部分 宝永7年(1710) ★

鳥の飼いを種類別に記した書物。作者は江戸時代中期の博物家・蘇生堂主人で、鶉の生態や飼育法を記した『鶉書』、『鶉目利問答書』も手掛けた。

飼育書の登場

